

「共闘・競創・協挑」が根付くフォア・ザ・チームの精神

統合後2シーズン目の初優勝

大阪市立大と大阪府立大の統合で誕生した大阪公立大が、
統合後2シーズン目となる秋季リーグ戦で初優勝に輝いた。

関西地区代表決定戦で敗れ明治神宮大会には届かなかったが、チームとして大きな一歩を刻んだ。

取材・文=服部健太郎 写真=石井愛子

野球部の全体練習が行われる専用グラウンドは杉本キャンパス(旧大阪市立大)にある



大阪公立大学



左から旧大阪市立大、統合した大阪公立大、旧大阪府立大の帽子

大阪市立大と大阪府立大が統合し、「大阪公立大学」として開学したのは今年の春。近畿学生一部リーグに所属していた両大学の硬式野球部も統合され、新たなスタートを切った。大阪公立大主将の蘭佑海(4年・清教学園)が振り返る。「自分が4年生になる年に統合するかもしれないというニュースは入学時に知っていたので、2年生の時に正式決定した時も大きな驚きはなかったです。ただ、統合によって野球部が具体的にどうなるのかはずっと白紙のままだった。野球部の統合が正式に決まり、実際に両チームで動き出したのは昨年の秋でした」。

大阪府立大が6位、大阪市立大が4位に終わった2021年秋季リーグが閉幕すると、統合後の運営体制を決める話し合いが本格的に始まった。しかし、初代監督の選定を含む、新体制の発足はすんなりとは運ばなかった。大学側を

大阪市立大のOBで、今春は監督補佐を務めた小林氏がこの秋から指揮を執る



ライバル校同士の統合。苦労もあったが、試行錯誤を続けながら一つのチームになってきた

交え、新たに外部から監督を迎え入れる案や当時の両チームの監督を新首脳陣として残す案が検討されたが決定には至らなかった。最終的には大阪府立大の主将だった大山翔大(4年・市・西宮)が選手兼学生監督に就任。大阪市立大の小林隼矢コーチが監督補佐に就き、大阪市立大の主将を務めていた蘭が新体制でも主将を担うことで落ち着いた。大阪府立大で主務を務めていた中彌一輝(4年・向

陽)は次のように証言する。「カライの異なるチームが統合することで、すり合わせなければいけないことが出てくる。ここからが大変だなと思いました。19年秋に38季ぶりに一部復帰を果たした大阪府立大。唯一のリーグ優勝は1985年秋まで遡る。一方の大阪市立大は4度のリーグ優勝実績があり、「全国でも勝てるチームを!」という明確な目標を掲げ、活動してきた。

日々の練習量にも違いがあった。週6日で活動してきた大阪市立大に対し、大阪府立大は週4日。週末の土、日曜日のどちらかは共用グラウンドが使用できないため、原則オフというスケジュールで活動してきた。中彌は「大学野球に対するチームの熱量の差は否めなかった」と語った。

統合後のチームの方向性を決める話し合いは大山監督、蘭主将を中心に選手のみで行われ、最終的には「活動は週6日。全国で勝てるチームを目指す」方針で固まった。蘭主将が話す。「僕は一部リーグに所属する体育会である以上、

本気で優勝を目指すチームであるべきという自分の考えを強く訴え、理解を求めました。大学4年間という時間を野球に注ぎたいと思っている本気の選手たちに対しては『絶対に優勝させるからついてこい!』と。でも中には『自分が大でやりたかったのはこの野球じゃない』と感じた部員もいたと思います。正式統合前の合同練習がスタートした昨年11月、大阪府立大サイドから10人近い退部者が出た。中彌は「府大の選手にとっては週の活動日が増え、生活リズムも変わる。環境の変化を受け入れることができなかった一部は選手はやめる選択を下しました。最後まで一緒にやりたい気持ちは強かったですが、彼らの気持ち、言い分も分





大阪市立大(昨秋4位)の「経験と実力」、大阪府立大(同6位)の「泥臭さ」、それぞれの強みを合わせることで新たなチームをつくっていく

それぞれの良さを尊重し 新たな時代を創っていく

かるんです」と語った。

統合後の新ユニフォームのデザインは選手間で意見を出し合い、決定した。「統合前の両チームのユニフォームのイメージを絶対に残そうという感じではなかったが、結果的に府大の縦縞は残りました。「メジャーリーグのサンディエゴ・パドレスのユニフォームがカッコいい」という意見が多く、パドレスをイメージした配色になりました」(中壘)

統合初年度のチームスローガンは「共闘・競創・協挑」に決まった。「4年生全員で考えました。チーム全員で協力し合いながら優勝に向かって挑戦者として立ち向かっていこう。大阪公立大学野球部として新たな時代を創っていく。そんな思いを込めました」

(蘭主将)

全学年を合わせた部員数は72人(マネジャー、アナリスト計15人を含む)。計57人在籍するプレーヤーのうち、大阪府立大出身は13人。今春、16人の1年生が加入した。推薦入試制度はなく、一般入試のみ。浪人経験のある野球部員は約4割。現3年生は約7割が浪人生活を経て入学した。

選手たちが授業を受けるキャンパスは大阪府堺市に位置する中百舌鳥キャンパス(旧大阪府立大)と大阪市住吉区大阪市に位置する杉本キャンパス(旧大阪市立大)に分かれ、2年生以上は自身の出

大阪市立大の主将だった園が、統合した新チームでも主将を務めた



大阪市立大出身の正中(写真左)、有正が投手陣の軸となり、秋リーグ優勝へと導いた



をかけた代表決定戦では勝たせてもらえない。接戦を演じたからそのうちいけると選手たちが思っているならばきつと永遠に勝たせてもらえないと思う」と悔しさをにじませた後、この大会を最後にチームを退く4年生に向け「最終学

年で野球部の統合もあり、ものすごく苦労した学年だったが最後までよく頑張ってくれた」と労った。「この舞台を経験し、悔しさを味わえた3年生以下にとっては貴重な秋となった。チームにとっても大きな収穫だと思っています。」
悲願の神宮を目指す、大阪公立大が新たなスタートを切った。

チームとしての練度を高め 春5位からの優勝達成！

統合を控えた春先はコロナ禍にともなう蔓延防止措置などの規制によって全体練習開始が2月末までずれこんだ。学校が定めた対外試合禁止期間が解けたのは3月下旬。春季リーグ開幕までに消化できたオープン戦はわずか2試合にとどまった。「統合を控えたチームを一つにしていくためにもたくさん集まって練習、試合を重ね、

話し合う時間が欲しかったです……」と園主将。春季リーグの最終成績は5位(6勝8敗)。リーグ戦終了後、実質、チームの指揮を執っていた小林監督補佐が監督に就任した。夏場にかけては週末に平均3試合の対外試合を組み、競争原理を働かせながら、春には思うように果たせなかったチームとしての練度を高めていった。

「合言葉は『凡事徹底』。普通のことを究めていくことが非凡につながり、ひいてはチームとしての強さとなる。当たり前のことを高いレベルで積み重ねることにこだわろうじゃないかと(小林監督)迎えた秋季リーグ、大阪公立大は勝ち点4で並んだ奈良学園大を勝率で上回り、統合後初優勝を飾った。躍進の大きな原動力となったのは有正智矢(4年・大阪・池田)、正中敦士(3年・小野)の二枚看板を擁する強力投手陣。守りを軸とした安定した試合運びが光った。

「統合前の両チームの土台がしっかりしていたことが優勝劇の大前提としてあつた。両チームを率いた前監督に敬意を込めて、感謝したいです。選手たちも一人ひとりが勝つために自分はどうすればいいかを突き詰めて、役割を全うしてくれたのが非常に良かった。フォア・ザ・チームの精神がチームにしっかりと根付いたことを確信できた秋でした。過去に大阪市立大と大阪府立大で計5度のリーグ優勝経験がありま

すが、全国の舞台に進出することはできなかった。今年は過去の壁を越えたい」
取材日の3日後に開幕した第53回明治神宮野球大会関西地区代表決定戦。大阪公立大は1回戦で相まみえた京都先端科学大に2対3で惜敗。翌日に行われた敗者復活戦でも天理大に0対2で敗れ、初の神宮の舞台には届かなかった。試合後、小林監督は「チーム力をもっと底上げしていかないと全国

を越えたい」
取材日の3日後に開幕した第53回明治神宮野球大会関西地区代表決定戦。大阪公立大は1回戦で相まみえた京都先端科学大に2対3で惜敗。翌日に行われた敗者復活戦でも天理大に0対2で敗れ、初の神宮の舞台には届かなかった。試合後、小林監督は「チーム力をもっと底上げしていかないと全国

身大学のキャンパスで授業を受けるケースが多い。野球部の全体練習が行われる専用グラウンドは杉本キャンパス内にあるが、両キャンパス間の移動時間が電車で約30分を要するため、平日はそれぞれのキャンパスにて2カ所に分かれ、練習を実施。全員がそろうのは週末のみだ。「試合前の木、金曜日はサインプレーの確認などもしたので、なるべく杉本グラウンドに集まってほしいという要望は出しているのですが、全員がそろうことはまずまずです」(園主将)。

「合言葉は『凡事徹底』。普通のことを究めていくことが非凡につながり、ひいてはチームとしての強さとなる。当たり前のことを高いレベルで積み重ねることにこだわろうじゃないかと(小林監督)迎えた秋季リーグ、大阪公立大は勝ち点4で並んだ奈良学園大を勝率で上回り、統合後初優勝を飾った。躍進の大きな原動力となったのは有正智矢(4年・大阪・池田)、正中敦士(3年・小野)の二枚看板を擁する強力投手陣。守りを軸とした安定した試合運びが光った。

「合言葉は『凡事徹底』。普通のことを究めていくことが非凡につながり、ひいてはチームとしての強さとなる。当たり前のことを高いレベルで積み重ねることにこだわろうじゃないかと(小林監督)迎えた秋季リーグ、大阪公立大は勝ち点4で並んだ奈良学園大を勝率で上回り、統合後初優勝を飾った。躍進の大きな原動力となったのは有正智矢(4年・大阪・池田)、正中敦士(3年・小野)の二枚看板を擁する強力投手陣。守りを軸とした安定した試合運びが光った。

「フォア・ザ・チームの精神がチームにしっかりと根付いたことを確信できた秋でした」(小林監督)



左から旧大阪市立大、統合した大阪公立大、旧大阪府立大のユニフォーム